むすんで、うみだす。
京都産業大学
KYOTO SANGYO UNIVERSITY

教育支援研究開発センターニュース

CERADES News

Oct.2026 Vol.34



対話から広がる、学びの可能性

教育支援研究開発センターでは、「教員–学生間の授業に関する対話」をはじめ、教員同士の情報交換や教職員と学生による価値観の共有など、さまざまな立場の人々がともに学び合う「対話」の機会を大切にしています。対話を通して互いの考えや経験を共有することは、新たな気づきや学びを生み出すだけでなく、学生一人ひとりの成長を支える教育支援につながります。また、それぞれの立場から大学教育を見つめ直し、より豊かな教育環境づくりを進めるきっかけにもなります。

本号では、新任教員と教育支援研究開発センター企画委員による情報交換・共有を目的に実施した「令和８年度新任教員研修会」の様子を報告します。
あわせて、教職学が三者それぞれの立場から報告した大学教育学会での発表や、教職員と学生が協働して企画・運営した全学 FD/SD 研修会について紹介します。



01 令和８年度 新任教員研修会　開催
「学修者の学びを高める教育実践について」

02 大学教育学会第48回大会に参加・発表しました！
– 教職学が三者それぞれの立場から報告 –

03 令和８年度 第１回全学 FD/SD 研修会　開催
「【学生企画】スチューデント・サクセスって知っていますか？
– 学生の声から始まる、大学の学びのアップデート –」

CERADES News Vol.34　2026 年 10 月発行
編集 / 発行　京都産業大学教育支援研究開発センター

〒603-8555　京都市北区上賀茂本山　Tel：(075) 705-1729
e-mail：kyoiku-shien-center@star.kyoto-su.ac.jp　　HP：https://www.kyoto-su.ac.jp/torikumi/cerades/

CERADES News は、京都産業大学の特色ある教育・学習の実践事例を紹介することを目的とし、セラデススタッフが企画・取材・デザイン製作している刊行物です。
CERADES（セラデス）は、教育支援研究開発センターの英語名称 Center for Research and Development for Educational Support の略称です。

01

令和８年度 新任教員研修会　開催
「学修者の学びを高める教育実践について」

本研修会は、オンデマンド配信動画での事前研修と対面での研修（５月 15 日（金）実施）の２部構成で行いました。
対面での研修には、新任教員 13 名を含む本学教職員 21 名が参加しました。

事前研修

本学の「ディプロマ・ポリシー（DP）に基づく８つの資質・能力」、学生の声を聴く対話（双方向）の取り組みである「教員–学生間の授業に関する対話」や授業アンケートの「学習成果実感調査」、４つのコモンズについてなどを解説した 30 分程度の動画を視聴

対面研修

グループに分かれ、新任教員と企画委員の間で FD の取り組み、授業運営の工夫、学生への対応、生成 AI・オンラインツールの使い方・使い分け等、様々な話題について、情報共有







開会挨拶

佐藤 賢一 教育支援研究開発センター長



教育・研究の現場は、自分自身は何も変わらずいろんなことをやり続けていると思う反面、学生や教職員は毎年少しずつ入れ替わり、いろんなことが目まぐるしく動き続けている場でもあると感じています。新任の先生方にお目にかかる機会は、元々いる教職員にとって新たな刺激や気づきをいただける貴重な機会です。本日こうして皆様とご一緒できることを楽しみにしておりました。

統括

三田 貴 副センター長



それぞれのテーブルでネットワーキングも広がったのではないかと思われます。今後もぜひ FD ラウンジ等にご参加いただき、生成 AI たオンラインツールとの付き合い方について教職員同士でざっくばらんに話したり、学生とも自由に交流できる場として活用していただきたいです。

参加した新任教員の声

- 学部を超えて、ちょっとした困りごとを話し合えて大変有意義だった。
- Microsoft Teams や moodle の Tips など、授業をより効果的に運営する方法について意見交換ができて良かった。
- 率直に参加させていただき良かったと思う。「他（学部・学科）の先生はどうやっているのだろう？」この疑問はこのような場がないと解決できなかったと思う。
- 悩みは共通していることがわかった。



mini topic

京都産業大学 教育プログラム支援制度 学内報告会　開催

６月３日（水）に教育プログラム支援制度学内報告会（令和７年度採択プログラム）を開催しました。
17 名の教職員が参加し、各報告に対する質問も活発に行われました。
令和８年度からは、本制度を再編した「教育イノベーション・トライアル支援制度」の運用を開始し、教育改革・改善に向けた取り組みをさらに支援しています。



＜報告者・テーマ＞

- 松尾 智晶 准教授 / 共通教育推進機構
  『初年次教育実践知の共有整理発信と持続的向上の基盤形成』
- 緒方 渚 教授 / 情報理工学部
  『学生エンゲージメントを高める学内情報提示アプリの開発と実証』
- 佐藤 賢一 教授 / 生命科学部
  『ハテナソンセミナーにおけるコーチングの導入、ワークブック制作』
- 河北 秀世 教授 / 理学部　※動画による報告
  『理学部 課題発見・解決チャレンジ』

02

大学教育学会第48回大会に参加・発表しました！
– 教職学が三者それぞれの立場から報告 –

６月６日（土）・７日（日）に創価大学で開催された大学教育学会に参加し、「学生参画型 FD/SD の実践–全学研修会における教職学協働プロセスの展開–」をテーマに口頭発表を行いました。本発表は、教育支援研究開発センターにおける学生参画型 FD/SD の取り組みを対象とし、教職学が協働して実施した全学 FD/SD 研修会の実践において、三者それぞれの立場から報告したものです。







職員 1

- 学生参画型 FD/SD の実施に至るまでのプロセス
- 学生が第２回全学 FD/SD 研修会への参加や企画委員会への参画を通して、教育改善における「参加」から「参画」へのエンゲージメントの変化について

学生 2

- 第４回全学 FD/SD 研修会の企画立案から当日運営までのプロセス
- 対話を促進するためのグループワークや会場レイアウトの工夫、事後アンケートの結果などについて
- 第４回研修会の企画・運営へと参画するに至った経緯

教員 3

- 本実践に関する総合的な考察
- 教職学協働によって生まれたエンゲージメントの変化
- 学生参画型 FD/SD の意義や今後の課題、展望

多くの教職員の方々にご参加いただき、立ち見が出るほどの盛況となりました。質疑応答では、学生参画の意義や可能性に期待する声が寄せられる一方で、今後の方向性や継続性、一部の学生への負担集中、学生の主体性との関係など、多角的な視点から活発な議論が交わされました。

参加・発表した職員の感想

多くのご意見やご助言をいただくとともに、本実践の成果だけでなく課題についても改めて見つめ直す機会となりました。学生参画型 FD/SD は試行錯誤を重ねながら発展を続けています。今後も教職学が協働しながら、本学ならではの学生参画型 FD/SD のあり方を模索し、その実践を積み重ねていきたいです。

03

８月４日（火）に全学FD/SD 研修会を開催しました。教員 25 名、職員14 名、学生 11 名、オブザーバー 10 名（学生１名、職員８名、教員１名）の計60名が参加し、教職員と学生が立場を越えて対話を深める機会となりました。

member



本研修会は、教育支援研究開発センターの教職員と学生が協働して企画・運営を行いました。今後も教職学がともに学び、対話を重ねながら、学生一人ひとりの成長につながる教育支援の実現に向けた取り組みを推進していきます。

令和８年度 第１回全学FD/SD研修会　開催
「【学生企画】スチューデント・サクセスって知っていますか？ – 学生の声から始まる、大学の学びのアップデート –」

前半

事例紹介



神田 麻衣子　氏
立命館大学
Student Success Program（SSP）
コーディネーター

- Student Success の考え方
- 専門職、ピア・サポーターが連携して学生の主体的な学びを支える支援体制
- 学生一人ひとりに寄り添う実践

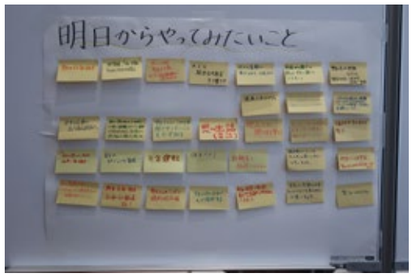
後半

価値観ワーク

【個人ワーク】
- 健康習慣・自己調整、正課、正課外、進路・自己啓発、対人関係・異文化交流の５つのカテゴリーから重要だと考える項目を最大 10 個選択
- 選択した項目に合計 100 点となるよう配点

【グループワーク】
- 教職学で構成されたグループ内で、一人２分ずつ配点の理由を共有（意見交換）
- 「今日の気づき」と「明日からやってみたいこと」を付箋に書き出す





参加者の声

＜教職員＞
- 学生は思った以上に考えているが、ゴールの視点は卒業・就職で、その先はあまり見据えていないかもしれない（今で精一杯かも）。
- 学生にとっての学びの充実に繋げていけるよう、これまで以上に学生が考えていること、思っていることにアンテナを張りたい。

＜学生＞
- 教員と職員は、今まで同じような人たちだと感じていたが、実際は価値観などがかなり異なっているとこが多いと感じた。
- 思った以上に「学生のため」の考えが多かった。